

『經典』に学ぶ

妙法蓮華經提婆達多品第十二

經文

仏諸の比丘に告げたまわく、未来世の中に若し善男子・善女人あって、妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん。所生の所には常に此の經を聞かん。若し人・天の中に生るれば勝妙の樂を受け、若し仏前にあらば蓮華より化生せん。

現代語訳

「のちの世において、もし信仰のあつい男女が妙法蓮華經の提婆達多品の教を聞いて、素直な心で信じ、ありがたいと感じ、疑いを起こすことがなければ、その人は地獄（怒りの世界）・餓鬼（貪りの世界）・畜生（愚かな世界）といった悪道におちいることなく、必ず仏の前に生まれ、常にこの教を聞くことができるでしょう。

もし人間界や天上界に生まれ変わるとしても、そこでは至高の精神的な喜びに満ちた生活をおくることができるでしょう。そして、再び仏の教を聞く機会に恵まれれば、凡夫の境界にいながらでも、仏に近い境地に達することができるでしょう」

地獄 人間の心にあてはめると、怒りに心を振り回されて行動し、常に苦しい気持ちで生きることを意味しています。

餓鬼 尽きることのない利己心の満足のために、次から次へとものごとを貪り、つねにイライラした気持ちで生きることです。

畜生 欲望のおもむくまま人の道にはずれた行ないをし、他人も自分も傷つけてしまい、不幸な気持ちで生きることです。

十方の仏前に生ぜん 一つ、どこへ行っても、仏さまとともにいる自覚を持つことができるという意味です。すなわち「私は仏さまに生かされている、いつも仏さまに守られているんだ」という自覚です。こういう自覚が常にあれば、人生に大きな自信と勇気が得られ、いつも幸せな大安心の境地で生きることができます。

常に此の經を聞かん 一つ、いつも仏さまの前にいる自覚がある人は、仏さまの教え

を忘れることはありません。ですからこの一節は、いつも心の中で教えをくり返し味わうことができるという意味です。

意味と受け止め方

仏性に目覚める

仏性とは「すべての人間の本质である、本仏（大いなる宇宙の根源のいのち）と同じいのちの働き」のことです。

釈尊は「すべての人間は、みな私の子どもである」と明言されていますから、私たちは本来、成長と調和を喜び輝ける存在なのです。しかし、実際に多くの人と接してみると、「この人は仏さまのようだ」という人ばかりに出会うとは限りません。むしろ反対に、「この人もほんとうに本仏の顕われなのだろうか」と疑いたくなるような人と出会うことがあります。

そこで釈尊は、人びとに「人間の本质は仏性である。どんな人であろうとも、その人の本质は本仏と同じいのちの働きなのだから、真理・法に基づいて自らの仏性にハッキリと目覚めれば、だれもが必ず仏になれる」ことを深く心に刻んでほしいという願いから、提婆達多品をお説きくださるのです。

提婆達多は、釈尊の父・浄飯王の弟である甘露飯王の子で、のちに十大弟子の一人となる阿難の兄にあたります。つまり、提婆達多も阿難も、釈尊とはいとこ同士なのです。提婆達多は、青少年時代から文武両道にすぐれ、釈尊とはよい意味のライバルでもありました。

釈尊が王宮を捨てて出家し、悟りを開かれたあとは、阿難とともに出家して熱心に修行に励みました。もともと頭脳明晰であったために、かなり進んだ境地にまで達したと伝えられています。

ところが提婆達多は、持ち前の強い増上慢の心を取り除くことができなかつたために、やがて釈尊に対抗心を抱くようになりました。釈尊が各国の王や長者をはじめ、多くの人びとから仰ぎ慕われていることを妬み、釈尊をおとしめようとさまざまに画策しました。また、釈尊の命を奪うため、崖から釈尊めがけて大岩を落として大けがを負わせたり、気の荒い巨象に酒を飲ませて襲わせたこともありました。

当時、仏教を信奉する人びとは、提婆達多を逆賊、大悪人と見ていました。ところが釈尊は、大勢の弟子たちの前で、驚くべきことを語るのです。

ぜんちしき
善知識

釈尊は、はじめにご自分の過去の世の話 をなさいます。

過去の世において釈尊は、ある国の王でしたが、真実の教え・最高の悟りを求め続けていました。教えを説いてくれる人があれば、一生のあいだその人に仕えようとも公言していました。

あるとき、一人の仙人が王の前に現われ、「私はすべての人を救う、すぐれた教えを知っています。もし王さまが私の言うとおりに従うなら、それを説いてあげましょう」と言いました。王はすぐに仙人に仕え、木の実集め、水くみ、薪拾いをはじめ、仙人の座るものが見つからなければ、王が地にはって腰掛けの代わりになりました。

このようにして何年も仕えるうちに、王は最高無上の教えを聞くことができたのです。

釈尊は、過去の世の話を終えたあと、「私が仏の悟りを得たのは、過去の世のそうした修行が一つの縁となっているのですが、じつは、その仙人は提婆達多の前身なのです。私は、提婆達多という善知識（善い友人）を得たおかげで仏となることができたのです」とおっしゃいました。そして、「提婆達多は、これから長いあいだ修行に励めば、必ず仏となることができるでしょう」と成仏の保証（授記）を与えられたのです。

弟子たちは、声も出せないほどに驚きました。

《まさか、あの悪人が仏になれるなんて……》

釈尊は、これまでにくり返しお説きになられた「仏性」ということを、人びとの胸に強く印象づけるために、提婆達多の例を持ち出されたのです。

はじめはまったく信じられなかった弟子たちも、「すべての現象は空である。固定した見方は誤りである」という教えを思い起こし、考えをめぐらすうちに、釈尊の説法の真意がしだいにわかってきました。

「現象として現われた人間のすがたはさまざまだけれども、その奥底には同じ仏のいのちを宿している。みんな本仏のいのちの顕われなのだ。つまり、本仏の生かす力・慈悲をすでに平等に受けているんだ。けれども多くの人には煩惱に振り回されることで自らの自覚（悟り）をくらし、本仏の慈悲に感応できないでいる。だから、自分の本質が仏性であることに気づき、煩惱をよく調御（コントロール）し、また煩惱そのものを善の力に変えていく努力をすれば、自らのいのちの本質が完全に自覚めて、

だれもが^{ほとけ}仏となることができんだ」

弟子たちは、提婆達多に授記^{あた}を与えられた説法^{せっぽう}を自分自身の問題^{もんだい}としてとらえ直す^{なお}ことができたために、すべての人が^{ほとけ}仏になれるという確信^{かくしん}を得て、釈尊^{しやくそん}の教えの尊^{とうと}さに、深い感銘^{かんめい}を受けたのでした。

提婆達多は、「釈尊^{しやくそん}に取って代わって^か教団^{きょうだん}のトップになりたい」という煩惱^{ぼんのう}にとらわれて、煩惱^{ぼんのう}のままに行動^{こうどう}しました。しかし、その煩惱^{ぼんのう}を「釈尊^{しやくそん}と同じように人びとを救おう」という、よい方向^{ほうこう}に変えれば、すばらしい力^{ちから}を発揮^{はつき}できたはずですよ。これが「煩惱即菩提^{ぼんのうそくぼだい}」ということです。お互いさまに日ごろの生活^{せいかつ}をふり返り、深くかみしめておきたい教え^{おし}です。

ぎやくえん まな 逆縁に学ぶ

釈尊^{しやくそん}は、提婆達多^{だいばだつた}を善知識^{ぜんちしき}と呼ばれました。提婆達多^{だいばだつた}のおかげで、釈尊^{しやくそん}ご自身がますます悟り^{さと}を深める^{ふか}ことができたのだと感謝^{かんしゃ}されているのです。すなわち、自分の都合^{つごう}の悪いこと^{わる}や辛い出来事^{つら}（逆縁^{ぎやくえん}）に遭遇^{そうぐう}したとき、それを人間的成長^{にんげんてきせいちよう}の糧^{かて}として消化^{しょうか}していくことの大切^{たいせつ}さを教^{おし}えてくださっているのです。私^{わたし}たちが「自らの成長・向上^{せいちよう こうじよう}」という根本^{こんぽんてき}的な願^{ねが}いを持^もって生きていくうえでは、よき師^い、よき友^{とも}、よき書^{しよ}といった喜^{よろこ}ばしいご縁^{えん}（順縁^{じゆんえん}）を求^{もと}め続^{つづ}けることが大切^{たいせつ}です。そして、たびたび生^{しょう}じる逆縁^{ぎやくえん}をも、私^{わたし}たちは真正面^{ましようめん}から受^うけとめていきましょう。そこにある、大きな「学び^{まな}」が必^{かなら}ず発見^{はっけん}できます。そのとき、慈悲^{じひ}に満^みちた仏^{ほとけ}さまの存在^{そんざい}を、肌^{はだ}で感^{かん}じることができるとでしょう。

事例から学ぶ

事例編では、各品に込められた教えを、私たちが日々の生活のなかで、どのように生かしていけばよいかを、具体的な事例をとおして考えていきます。

鈴木さん一家プロフィール

おばあちゃん・ミチコさん（75）...校成会の青年部活動も経験している信仰二代目会員

アキオさん（45）...一家の大黒柱。ミチコさんの末息子

アキオさんの妻・タカエさん（38）...婦人部リーダー。行動派お母さん

長女・ケイコさん（16）...やさしい心の持ち主の高校一年生。プラスバンド部

長男・ヒロシくん（9）...元気いっぱいの小学三年生

中学校の先輩

高校二年生のケイコさんはプラスバンド部に所属しています。先月末までに、七人の一年生が入部してきました。後輩から「鈴木先輩」と呼ばれると、何だか照れくさい感じがします。そんなケイコさんには、新入部員を迎えるこの時期になると、ある出来事が思い起こされるのでした。

それは中学のときのことです。ケイコさんが二年生に進級したその年、吹奏楽部には新入部員が三人しかいませんでした。初めてできた後輩の存在がうれしい反面、辞められてはたいへんという思いから、ケイコさんは三人をととても大事にしました。一年生の役割である部室の掃除や楽譜のコピーを手伝ったり、練習後もおしゃべりをしたりと、自分なりの努力をしていたのです。

ある晩、三年生で吹奏楽部部長のアカネ先輩から電話がかかってきました。「あなたが新入生に甘くしているから、いつまでも新人に一年生としての態度や仕事が目につかないじゃない。先輩後輩のけじめをつけないと、部全体の統制が乱れるの。それがひいては、演奏にも影響を及ぼすのよ」

先輩の厳しい口調に、ケイコさんは返す言葉がありませんでした。しかし、ケイコさんに見れば部のことを考えて行動しているつもりでしたから、とてもショックでした。

それからというもの、すっかりアカネ先輩が苦手になり、二人の関係はぎくしゃく

したものになってしまったのです。

先輩がいたからこそ

「そんなこともあったわね。ケイコは、いまもアカネ先輩のことが苦手？」
学校から帰ってきたケイコさんと母親のタカエさんが、台所でお菓子を食べながら話
しています。

「うん。微妙な感じ」

「そうだ、ケイコが中二のときにお母さんが言ったことを覚えている？」

「うん。私にも先輩から言われるだけの原因があったんじゃないかしらっていうこ
とでしょう？あのとき私は、お母さんにそう言われてショックだったのよ。私は部の
存続のことを考えて新人を大切にしていただけで、新人を絶対に甘やかしてはいなか
ったんだから。現に演劇部は、二年連続で新人が入らなくて、廃部になってしまっ
たのよ」

「お母さんは、ケイコを責めてそう言ったんじゃないのよ」

「うん、いまはわかってる。アカネ先輩は誤解していたのよ。あのとき私がどうい
う気持ちで新人と接していたかを、聞いてくれればよかったのに」

「ケイコも、だんだん大人になってきたね。自分が相手に誤解をさせたと、冷静に考
えられるようになったんだ」

「うん誤解させたのは、たしかに私なんだよね」

「そういえば、ケイコは三年生になって部長に選ばれたじゃない。ケイコの部長と
しての評価は、結構高かったよね。PTAの役員会でも、よく言われたもの」

「みんな大げさなのよ」

「そうそう。ケイコが部長のとき、一年生の部員にマユミちゃんっていたじゃない。
ものすごく気むずかしい子だったわよね。あのマユミちゃんが、唯一ケイコの言うこ
とだけは素直に聞くって、学校中の有名な話だった」

「マユミちゃんとき合うには、彼女の話をしっかり聞いてあげることが大事な
のよ。こちらが聞いてあげないから、マユミちゃんもこちらの話聞いてくれなくな
るの」

「ケイコは、どこでそんな人間関係の機微を学んだの？もしかして、アカネ先輩か
ら？」

「まあね。私はアカネ先輩が苦手だったけど、尊敬はしているの。アカネ先輩の姿
を見て、部長としての役割っていうのかな、部員をどう引っ張っていったらいいかと

か、予算の折衝やトラブルの解決方法など、リーダーとして必要なものを学ばせてもらったと思っているの」

「そうなんだ。じゃあ、アカネ先輩様々だね」

「そうね。一時は憎らしいと思ったこともあったけど、時がたつにつれ、お陰さまで思えるようになったの」

「仏教では、この世の中にむだなものは何一つとしてないと教えているの。すべての出来事は、仏さまがその人によりよく成長してほしいと願われて、現象として生じているのよ。だからケイコには、仏さまがアカネ先輩という存在をとおして、人生の勉強をしてほしいために、深い慈悲の思いからあの出来事を与えてくださったんだと思うわ」

「そうね。中二のあのとき、アカネ先輩が厳しい言い方をしてくれたから、私が部のことを大事に考えていたとしても、独りよがりではいけないっていうことに気づくことができたんだもの」

「ほんとう？」

「うん。そこに気づくのに一か月ぐらいかかったけどね。リーダーシップとは何かを身をもって示してくれた先輩がいなかったら、私が部長になっても、みんなのすべて気持ちをつかむ術もわからず、部員がバラバラの気持ちでいたかもしれないと、いまはほんとうにそう思えるのよ」

「苦手な相手こそ、自分を高めてくれる仏さまの遣いなね」